

いのち 生命のにぎわいとつながり

No. 54

平成29年7月

房総半島でも、梅雨どきや秋には多くのきのこに出会えます。赤、白、オレンジ、茶色や黒色など色も鮮やかで、それらの中には光るきのこもあります。また、じっくり観察すると色の他にも多様な造形美が見られます。この夏の中央博物館の企画展「きのこワンダーランド」では、房総の自然の中で出会える不思議なきのこを紹介しています。

また、本号では、房総のきのこ博物館の関わりや、昨年度改訂した千葉県レッドリスト植物・菌類編の解説と今年度の環境功労者知事感謝状の贈呈者についても報告します。

房総のきのこ博物館の関わり



シロオビテングタケ

きのこ大発生的一年だった2000（平成12）年秋。房総半島の南部に位置する東京大学の千葉演習林内のある谷に発生していたものが新種として記載されました。その後、千葉県はおろか世界のどこからも同じ種類は採集されていません。本種は他のシイ・カシ林と共生するテングタケ類同様、ヒマラヤ中腹から西日本にかけての東アジアの照葉樹林に広く分布していたものが、他の地域の森の消滅とともに分布域が狭くなり、とうとうアジアの東の端の房総の森に生き残ったものだと思われるのです。本種は房総の自然の大切さを教えてくれる貴重なきのこの一つです。

CONTENTS

- 1 房総のきのこ博物館の関わり 1
- 2 千葉県レッドリスト植物・菌類編が改訂されました 3
- 3 千葉県環境功労者知事感謝状を安房生物愛好会と鴨川シーワールドに贈呈!! 3
- 4 千葉の食文化（なめろう） 4
- 5 千葉県の外来種（ムネアカハラビロカマキリ） 4



千葉県立中央博物館では、平成29年7月22日(土)から12月27日(水)まで、企画展「きのこワンダーランド」を開催しています。博物館では約30年間の活動により約3万点以上のきのこの標本を収集してきました。今回の展示ではそのコレクションの中から房総の自然を物語るきのこを選びすぐって展示します。あわせて世界や房総のきのこ文化、里山ときのこの深い秘密についても豊富な資料で紹介します。

○房総のきのこ研究のはじまり

平成元年にオープンした千葉県立中央博物館では、他の生物同様、県内の目録作りの一環として野生きのこの標本の収集も開始しました。房総は独特のきのこ文化を持つ地域で、房総のきのこ御三家(と、私が勝手によんでいる)、ハツタケ、アミタケ、ショウロに代表される、マツ林と共生するきのこ類が好まれてきました。江戸時代からの長い歴史を持つきのこの食文化はあったのですが、その本格的な調査はほとんど行なわれておらず、房総半島には実際どんなきのこが見られるのか、分からない状態の中で博物館の調査はスタートしました。

平成3年には博物館が拠点となり千葉菌類談話会というきのこ愛好会も発足しました。最初は会員のほぼ全員がシロウト。しかし巨大なコウタケ、猛毒のドクツルタケなど、珍しいきのこが採れたといっでは博物館に持ってきてもらえます。そんなことでいぶん博物館の基礎コレクションも増えていきました。

しだいに千葉市内にきのこ好きが増えはじめた10年目くらいのこと。それまでは食用とは知られていなかった春の季節のウメハルシメジが、発生と同時に市内から一斉に姿を消したことがあります。みんなが総出で美味なきのこを採りはじめたのです。きのこは食べながら種類を覚えていく。そのことを実感した最初の出来事でした。

そして談話会の実力も次第に上がっていき、食べられるものから、食べられないものへと関心も広がっていきました。ある年の観察会で集まってきた標本を前にしたある会員の発言、「このきのこは新種の可能性があるから専門家に送らしましょう」。どれが未記載種なのか、どのきのこが専門家の関心の対象なのか、そのことが分かる会員が増え始めたのです。送った標本はアオミドリタマゴテングタケという新種になりました。正基準標本(ホロタイプ)の産地は、談話会の定例観察会の場所、千葉市の泉自然公

園でした。会員の実力が本当に上がっていったことを示す事件でした。もちろん、その標本は現在博物館の貴重なコレクションの一つとなっています。

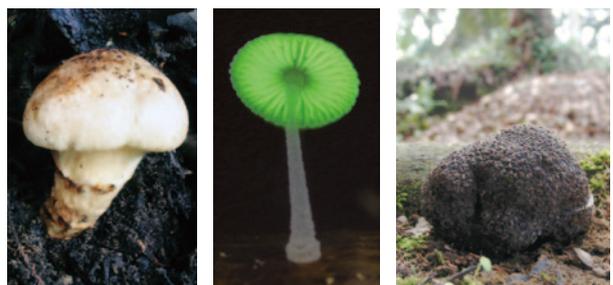
○きのこからみた房総の森

現在、博物館収蔵の房総産のきのこ標本は2万点以上になりました。目録も充実し千葉県産のきのこ類は現在約700種。千葉県は標本に裏付けられたきのこの基礎データのある、全国でも珍しい県となりました。

同時に、房総のきのこ相の特徴が次第に姿を現してきました。その特徴は、やはり、1) 房総の自然植生であるシイ・カシ林のきのこ。戦後、中尾佐助が発見した東アジア独自のブナ科常緑のシイ・カシの照葉樹林帯。このヒマラヤ中腹から西日本まで広がるこの森には、植物と共進化した固有のきのこ類も見られます。房総の自然の来歴を教えてくれるきのこ群です。そして、2) 江戸時代から続く里山のマツ林と共生するきのこ。御三家以外にもいろいろあります。さらに、3) 里山林であるイヌシデ・コナラ林にも興味深い種類が沢山見られます。4) 外房・内房の砂浜海岸にも珍しい種類がみられます。そんな野生きのこが房総の自然を特徴づけるきのこの種類であると言えるのですが、それは博物館が完成し、みんなときのこ採りをしてきて、博物館の標本が集まってきて、初めて分かったことなのです。

○きのこ標本が語る房総の自然ときのこ展

このようにして約30年間に博物館に集まった新種のきのこのもとになった正基準標本は20点以上、その他のタイプ標本類は100点以上。これらの貴重な標本群は、房総や日本の自然を語ってくれるばかりでなく、世界に発信する生物多様性情報でもあります。以上の貴重な標本群以外にも、地球温暖化とともに県内にひろがってきたオオシロカラカサタケ、勝浦の朝市に並んでいた珍菌ニセマツタケ、県内の小学校の校庭の片隅で採れたヒマラヤと日本をつなぐイボセイヨウショウロ、南房総の光るきのこ等々、数多くの標本と情報が集まってきました。本展では、これらの標本に「房総のきのこ事情」を物語ってもらいます。



写真左からニセマツタケ ヤコウタケ イボセイヨウショウロ
(吹春 俊光 千葉県立中央博物館)

千葉県レッドリスト 植物・菌類編が改訂されました



近年、地球規模で自然環境に変化が生じ、あらゆる地域で野生生物の減少が見られていることから、生物多様性の保護は国際的な課題となっています。これは日本国内、さらには千葉県内でも同様の状況です。そこで千葉県では、県内において絶滅のおそれのある野生生物種を

掲載し、その重要性を6段階で評価した「千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック」を1995（平成7）年から作成してきました。

千葉県レッドデータブックは法的拘束力を伴うものではありませんが、多くの県民の方々に貴重な野生生物の現状を理解し、自然との共生の在り方を考えていただくことを目的としており、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが期待されます。

2017（平成29）年3月には、県内の野生生物のうち植物と菌類を扱った「千葉県レッドリスト植物・菌類編2017年改訂版」を発行しました。本県のレッドリストとは、レッドデータブック発行後の自然環境の変化を受けて、保全上の重要性を再評価する必要が生じた種類をリスト形式でまとめた資料で、野生生物の生息・生育状況の変化に応じて迅速な対応を目指したものです。

レッドデータブック植物・菌類編が最後に発行されたのは2009年ですので、実に8年ぶりの改訂となりました。2017年改訂版の掲載種数は1,114種となり、前回のレッドデータブック989種に比べて125種も増加しています。これらには、県内から絶滅したと判断された種や、絶滅のおそれが極めて高いとされた種類が、たいへん多く含まれています。

また、今回の改訂では、40種以上がレッドデータブック・リストから除外されましたが、そのほとんどは生育地や個体数が増加したためではなく、野外調査や博物館等に収蔵されている標本の精査により、知られていなかった生育地が発見されたことによるものです。

このように、少なくとも千葉県の自然に関しては、状況が好転したとは考えにくく、また、自然環境の調査自体もまだまだ十分でないことが浮き彫りとなりま

した。環境保全の重要性が叫ばれるようになって久しいですが、地方自治体はもちろん、企業、団体、個人など様々なレベルで、よりいっそうの環境保全への積極的な取り組みが必要であることが窺えます。

千葉県レッドリスト植物・菌類編2017年改訂版は、当センターのウェブサイトから無料でダウンロードできますので、ぜひ御活用ください。

http://www.bdcchiba.jp/endangered/endang_index.html#rdb

（奥田 昌明 千葉県生物多様性センター）

千葉県環境功労者知事感謝状を安房生物愛好会と鴨川シーワールドに贈呈!!

平成29年6月1日（木）に、安房生物愛好会と鴨川シーワールドに平成29年度千葉県環境功労者知事感謝状が贈呈されました。

安房生物愛好会は長年にわたり特定外来生物のナルトサワギクの防除活動を安房地域において毎週実施しており、生物多様性の保全への貢献が認められたものです。酪農発祥の地である千葉県としては、繁殖力が強く毒性を有するナルトサワギクの牧草地への侵入や家畜への被害を防ぐ必要があるため、本団体の防除活動の功績は非常に大きなものです。

また、鴨川シーワールドは、絶滅危惧種で国内希少野生動物種のシャープゲンゴロウモドキや国の天然記念物であるミヤコタナゴの千葉県固有系統の飼育方法を確立し、系統保存に貢献されています。さらにこれらを水族館内に生態展示することで、県民への啓発活動にも貢献したことが認められました。

この感謝状は、平成20年度から県内の環境美化又は環境保全活動の推進に顕著な功績があった個人や団体に対して、その功績をたたえるために千葉県知事が表彰するもので、今年度は4名の方と4団体に贈呈しました。この場を借りましてお祝い申し上げます。

（大木 淳一 千葉県生物多様性センター）



受賞した安房生物愛好会の小林洋生会長（左）と鴨川シーワールドの齋藤純康展示課長（右）

千葉の食文化 なめろう

千葉県は周囲を海と川に囲まれ、海岸線は533.5kmにも及びます。そのため、サンマやイワシなどの水揚げが多く、代表的な郷土料理がいくつも誕生しました。外房で有名な「なめろう」は、獲れたばかりの魚を包丁の背でトントンとたたいて生のまま食べる料理で、元来は漁師が船上で調理したものであり、素朴な野性味が特徴です。料理が盛られた皿まで舐めてしまうほど美味しかったことから「なめろう」と呼ばれるようになったそうです。食材とする魚は、主にアジやサンマ、イワシ、トビウオなどの青魚ですが、特にアジは人気が高く、旬を迎える5～7月にかけては脂ものり、大変美味しくいただけます。

簡単な作り方としては、①魚の青臭さを抑え食べやすくする薬味として、大葉、ショウガとネギをみじん切りにする。②刺身用のアジを3枚におろして皮をはぎ、小骨を取り除き、ざく切りにする。③少



量の味噌と①と②をあわせて包丁の背でたたき、アジが5mmほどの大きさになったらよく混ぜ、器に大葉を敷き、きれいに盛り付ければ完成です。

また、なめろうを平らな皿に盛り、包丁で網目を入れて冷蔵庫でよく冷やして酢をふりかける「たたきなます」、柏餅のように大葉でなめろうを包み、熱したフライパンで焼く「山家焼き」なども楽しめます。短時間で調理できますので、新鮮なアジが手に入った際には、夕食や晩酌のお供に作ってみてはいかがでしょうか。(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)

お知らせ ～巡回展の開催～

今年度も市町村等が主催する環境フェアなどで、県民の皆さんに千葉県の生物多様性を知っていただくためにパネルの展示とクイズを行います。ぜひお立ち寄りください。

- H29.9.23(土) エコフェアいちほら
於：千葉出光会館
- H29.10.9(月) エコmesse2017inちば
於：幕張メッセ国際会議場
- H29.10.28(土) 第15回印旛沼流域環境・体験フェア
於：佐倉ふるさと広場向かい側
- H29.11.3(金) 第4回自然誌フェスタ千葉
於：千葉県立中央博物館

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)

千葉県の外来種

ムネアカハラビロカマキリ



撮影：荻部 治紀

セアカゴケグモ、ツマアカスズメバチ、クビアカツヤカミキリなど、近年話題になる外来の虫(クモを含む)の名前には、なぜか「赤」が付きまします。そして、今回の主役である「ムネアカハラビロカマキリ」も、前述の3種ほど有名ではありませんが、新たに確認された外来種です。

子どもの頃は誰もが一度は憧れるカマキリの仲間ですが、種類が少ない(県内には8種)ためか、「虫屋(昆虫類の愛好家)」にはあまり魅力的ではないようです。そのようなカマキリの仲間が、本種の発見により2010年代に話題に上がりました。2010(平成22)年に福井県で発見されたことを皮切りに全国各地で確認され、2015(平成27)年には船橋市内でも確認されています。

本種は、名前のとおり、胸部に桃色を呈するハラビロカマキリの仲間、体長はハラビロカマキリよりも大きく、オオカマキリよりも小さいです。国内では、本種の侵入・増加に伴って在来種のハラビロカマキリが確認されなくなった事例が報告されています。実際、昨秋に神奈川県相模原市内で本種の調査を行った際には、ハラビロカマキリを見つけることができませんでした。有力な導入経路として、中国等から安価で輸入されている外国産の竹ぼうきに卵鞘が付着していたのではないかと、という仮説も立てられていますが、実態は不明なままです。

ハラビロカマキリの仲間は樹上性で見かけることのできる時期は限られますが、秋期にカマキリの轢死体を見る等の観察方法もあります。特徴的な胸の色を見ていただくと、容易に同定することができると思います。もしかすると、冬期に店先の竹ぼうきで卵鞘を見つけることができるかもしれません。外来種は早期に発見して対策を行うことができれば、その問題が拡大する前に根絶させることができます。ぜひ、モニタリングに御協力ください。

子どもの頃の憧れであった生き物は、いつまでも憧れであってほしいものです。身近な生き物が知らぬ間に外来生物に置き換わってしまうことは、恐ろしくもあり寂しくもあります。

(古川 大恭 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.54 平成29年7月31日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。